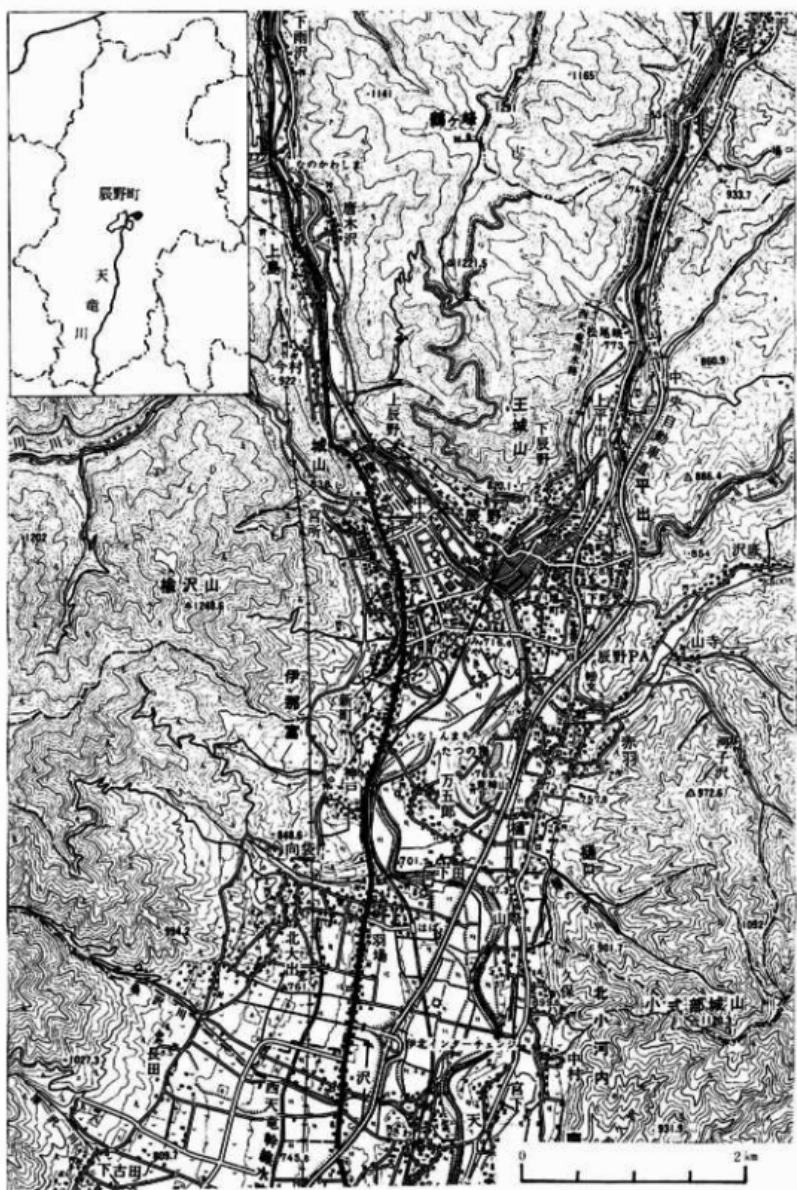


# 上原遺跡

区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

長野県辰野町教育委員会



第1図 上原遺跡の位置（○印）

## 序

辰野町では現在250ヵ所にのぼる埋蔵文化財包蔵地が知られています。近年開発行為の進行に伴って、これら包蔵地の緊急発掘調査が増加しております。

本件調査もこうした緊急調査のひとつで、土地区画整理事業に伴い事前に発掘調査を行いました。

この遺跡は宮木地区南西の段丘上に立地しており、付近には宮木諏訪神社や縄文時代の天狗坂遺跡などもあって、歴史的な環境に恵まれたところとして注目されていました。

調査の結果、道路敷内から縄文時代後期あるいは晩期の土器が集中した箇所が発見され、類例の少ないこの時期の貴重な資料となりました。また、出土したわずかな陶磁器片は、中世以降江戸時代の伝兵衛井筋開削に伴うこの地の歴史を物語るものです。

ここに調査報告書を刊行する運びとなり、ご指導を賜った長野県教育委員会文化課をはじめ、原土地区画整理組合、それに直接調査に従事された調査団の皆様に深く感謝申し上げるとともに、この報告書が広く活用されることを願うしだいです。

平成5年3月

辰野町教育委員会

教育長 小林晃一

## 例　　言

- 本書は、辰野町原土地地区画整理組合による長野県上伊那郡辰野町大字伊那富3166番地ほか32筆内の土地地区画整理事業に伴う上原遺跡の発掘調査報告書である。
- 遺跡は区画整理事業地一帯の字上原及び下原に所在しているが、便宜上遺跡の名称は上原と呼称しているのでそれによった。
- 発掘調査は、区画整理による新設道路部分（延長829m）について、辰野町長小沢惣衛の委託により、辰野町教育委員会が考古学研究者友野良一を団長とする調査団を編成して行った。  
(昭和56年度)なお、昭和57、58年度には、区画整理事業地内における辰野町土地開発公社分譲地に係る試掘調査を辰野町教育委員会が実施したので、本書で合わせて報告することとした。
- 発掘調査の現場作業は、昭和57年1月14日から1月28日まで実施した。
- 発掘調査現場における記録は主として友野良一、三村兼清が行い、遺構等の実測図作成は古屋公彦が担当した。
- 出土遺物等の整理及び本書の執筆、編集は赤羽義洋が担当した。  
なお、出土遺物のうち陶磁器片については、愛知県陶磁資料館井上喜久男氏、石器石材については福島史雄氏の教示を得た。
- 調査及び整理にあたっては、実測図、写真等多数を作成したが、それらの資料は出土遺物とともに辰野町教育委員会が保管している。

## 目　　次

序	
例言	
I 保護措置の経緯	1
II 発掘調査の経過	2
III 遺跡の環境	6
IV 遺構と遺物	10
V 調査のまとめ	18
発掘調査関係者名簿	19

## 図版目次

図版 1 遺跡遠景／遺跡の現況	13
図版 2 第2号遺構／縄文時代後期の土器	14
図版 3 縄文時代の石器／須恵器・陶磁器	15
図版 4 発掘調査風景	16
図版 5 試掘調査地近景	17

## I 保護措置の経緯

辰野町宮木上原、下原地籍の不整形な畠地一帯を区画整理し、住宅地として開発するために、昭和56年6月以降その準備が具体的に進められていたが、11月12日辰野町原土地地区画整理組合（米澤傳理事長）の設立が認可された。この開発予定地は、県内考古学研究者らにより100点余の遺物が表面採集されている上原遺跡であるため、急きょ区画整理組合、辰野町教育委員会、それに考古学研究者友野良一、三村兼清両氏の三者でこの遺跡の保護について協議を行った。その結果、町有地となる道路予定地内は、上下水道の配管及び舗装等の工事が予定されており、当面この部分を対象に調査を実施することとした。調査は昭和57年1月14日から開始し、道路予定地（延長829m、3796.4m<sup>2</sup>）に試掘坑を設けて行い、遺構等確認した場合は拡張して実施した。

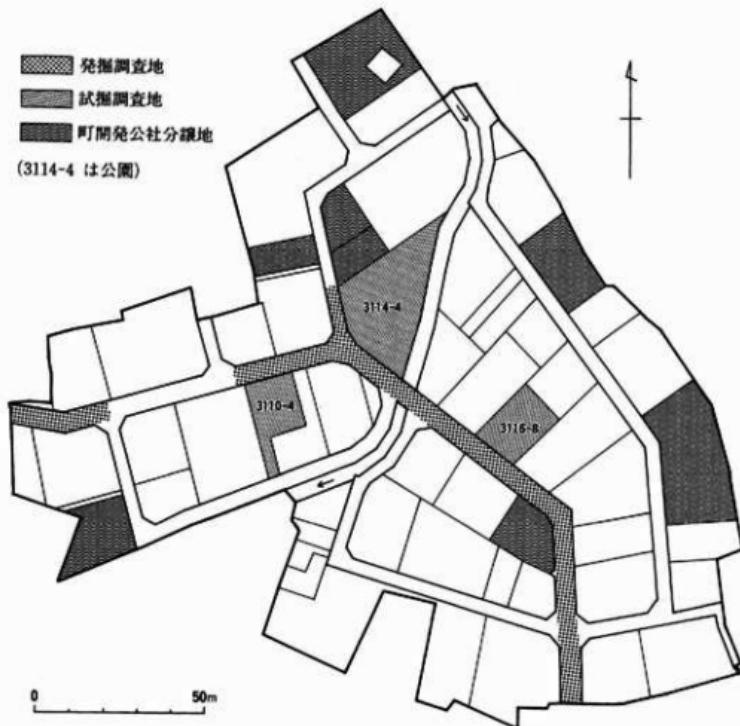
昭和57年10月、区画整理後に辰野町土地開発公社が所有し、宅地分譲を予定する7区画内の遺跡の保護について、同公社から辰野町教育委員会へ照会があった。昭和57年11月、3110番地の4及び3116番地の8における個人住宅建設予定地を対象に、試掘坑数ヶ所により調査を行った。さらに昭和58年12月、3114番地の4の公園内に遊具等を設置するため削平工事が行われることとなり、この区画内に5ヶ所の試掘坑を設け調査を実施した。



第2図 開発予定地の位置

## II 発掘調査の経過

調査日誌 昭和57年1月14日 辰野町公民館会議室において、打ち合わせと調査団の編成を行ったあと、現地道路敷予定地内にグリッドを設定して調査を開始する／1月15日 11～20坑の掘り下げと1～8坑の記録を行なう／1月16日 各坑の土層断面の記録と11～20坑の掘り下げ。9坑を拡張する／1月17日 遺跡の立地から、旧石器時代遺物出土の可能性があり、14坑でロームの深掘りを開始する。伝兵衛堀西側へ21～35坑を設定し、掘り下げを行なう／1月18日 各坑の掘り下げを行なう。寒冷で降雪のため午前中で作業を打ち切る／1月19日 降雪のため作業は休み。今後の進め方について打ち合わせを行なう／1月20日 除雪作業。今回調査区西端部に1～8坑を設定し、B地区とする。36、37坑の掘り下げを行なうが、ローム面まではしだいに深く



第3図 区画整理地内における調査位置



第4図 発掘調査区位置図

なってきた／1月21日 B地区各坑の掘り下げとA地区的記録作業を行なう／1月22日 38～40坑の掘り下げを行ない、予定道路の三叉路から北へ新たに調査坑を設け、C地区とする／1月23日 C区1～9坑の掘り下げを行なう。28坑内で確認されていた落ち込みの広がりを追求するため、C区1、2坑へ拡張し、第2号遺構とする／1月24日 寒冷。28坑を東側へも拡張して調査する。陶磁器が出土し、拡張したA区9坑を細部調査し、旧水田基盤層から遺物が出土していたことが判明。28坑東側の拡張区内から無文の土器片が多数出土する／1月25日 第2号遺構周囲を拡張するとともに、実測作業を行なう／1月26日

第2号遺構の細部調査／1月27日 第2号遺構の実測、写真撮影等の記録作業を行なう。本日で現場作業を終了。上島建設、チノン㈱、米沢区画整理組合長宅へあいさつに伺う／1月28日 器材等のかたつけと、遺物整理等についての打合せを行なう。

なお、今回発掘した面積は、調査坑57ヶ所、拡張区等合計し、354m<sup>2</sup>である。

また、14坑深掘り地点のローム層内からは遺物の出土は確認されなかった。



第5図 調査区グリッド図

### III 遺跡の環境

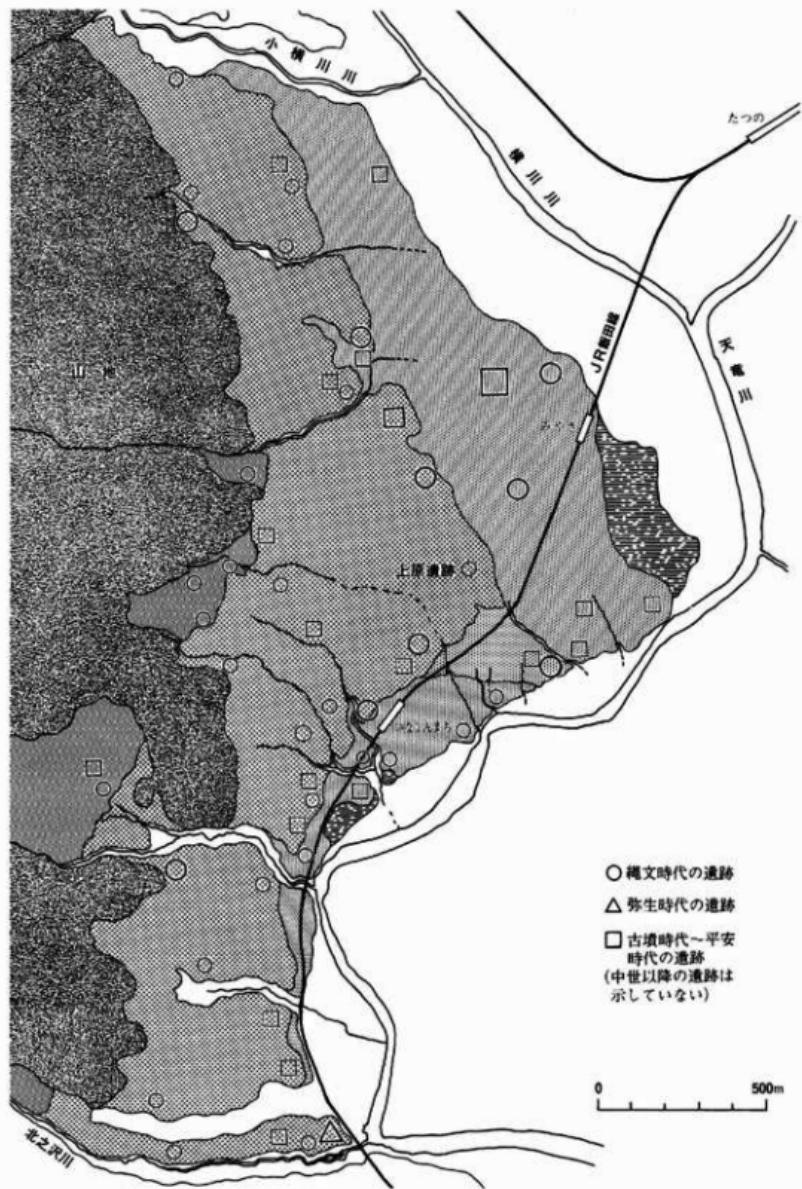
**地理的位置と地形・地質** 上原遺跡は辰野町宮木地区南西の段丘上にあり、県道下諏訪辰野線南側一帯に所在する。標高は730~735mにあり、天竜川との比高は25mである。遺跡西方は木曾山脈北部に属する経ヶ岳山塊北端で、檜沢山（標高1248.6m）があり、その山脈に源を発して東へ流れる檜沢川や滝洞川によって形成された複合扇状地が山麓に展開している。

南北70kmに達する伊那盆地の最北端に位置する辰野町の平坦部一帯は、木曾山脈の北端と赤石山脈の北端とによって西と東を遮られており、北には標高1035mの大城山がある。これら三方の山地に囲まれた平坦部は、構造運動によって形成されたとされる伊那盆地の低地が埋ったもので、基盤の古生層の上に天竜川本流の古い堆積物、諏訪湖周辺の火山から供給された火山碎屑物、天竜支流河川から運ばれてきた堆積物、風成テフラ、それに崖錐堆積物や沖積土によって構成されている。

一方この地域には、天竜川沿岸から山麓にかけて段丘が発達しており、天竜川西側で4段、天竜川東の荒神山周辺では6段が確認されている。上原遺跡は高位の第1段丘先端部に立地している。この段丘はPm-III降灰以前に離水し、中期～新期ロームが堆積していると考えられている。また、基盤を構成する横川疊層には、砂岩、粘板岩、珪岩、チャートなどが含まれる。なお、この段丘より一段下位の段丘上に立地する新町大原遺跡の発掘調査では、疊層上に新期ロームをのせていることが確認され、特にその先端部では、疊層上に堆積したわずかな再堆積ローム層上から縄文時代早期前半の押型文土器が出土しており、おそらくも8000年前には完全に離水したことが考えられる。これらの段丘の成因については、断層及び河成によると考えられるようになったが、西の山麓には活断層によるケルン・コルやケルン・バット地形が知られており、ローム層を切る断層の露頭も観察されている。

**歴史的な環境** 辰野町宮木地区から新町地区にかけての一帯は町内でも遺跡が密集するところのひとつで、低位から高位にかけての段丘上には大規模な遺跡が櫛並みに立地している。町内最大の面積をもつ前田遺跡をはじめ、近年発掘調査が行われた遺跡も多い。

柳林遺跡は昭和61年と平成元年に発掘調査が行われ、縄文時代早期の押型文土器を出土した住居址や集石炉が発見されている。上の山遺跡は昭和61年以降4次にわたって発掘調査が実施され、縄文時代早期末葉の小窓穴や中期の住居址群が出土している。檜沢山麓遺跡は縄文時代前期末葉の遺物が採集されるところとして古くから知られており、泉水遺跡からは第二次大戦前に縄文時代後期の土偶が発見され、現在県宝に指定されている。伊那新町駅西の歲ノ神遺跡は昭和60年の墓地改修工事の折に、縄文時代中期の大形埋甕が発見され、この時期の集落址の可能性がある。この付近は山麓から何本かの小河川が合流するところで、飯田線敷設工事の際には大量の土器が出土したと伝えられている。また、これら小河川に挟まれた東西にのびる台地上には多くの遺跡が立地している。新町大原遺跡は上原遺跡の東の中位段丘上にあり、昭和63年に発掘調査を実施



第6図 宮木～新町地区の段丘と遺跡



第7図 周辺遺跡分布図

**周辺の遺跡**

40. 湯舟（縄文・中、奈良・平安）41. 榆沢山麓（縄文・前・中、奈良・平安）43. 上の山（縄文・早～中、中世）昭61～平1発掘調査 44. 久保田（縄文・中、奈良・平安）45. 月丘の森（古墳、奈良・平安）46. 前田（縄文・中、奈良・平安）47. 上原 48. 天狗坂（縄文・中）49. 新町北原（縄文・中、平安、中世）50. 富士塚東（縄文・中、奈良・平安）51. 柳林（縄文・早～後）昭61、平1発掘調査 52. 泉水（縄文・後）県宝指定土偶出土 53. 泉水南（奈良・平安）54. 青木原（縄文・中）55. 曾利畠（縄文・中）56. 宮垣外（奈良・平安、中世）57. 譲訪神社前（中世）58. うずらい北（縄文・中、奈良・平安）59. うずらい南（縄文・中、奈良・平安）60. 新町大原（縄文・早～後、平安）昭63発掘調査 61. 新町原田北（縄文・中）昭62試掘調査 62. 新町原田南（縄文・早～中、中世）昭63発掘調査 63. 沢田（縄文・中？、平安？）64. 道下南（縄文）215. 長久寺下（古墳～平安）221. 柳林第二（縄文・早・中）222. 富士塚北（縄文・中～後）昭57発掘調査 223. 滝洞（中世）昭60発掘調査 230. 仮宿（奈良・平安）224. 木戸脇（縄文・後）245. 歲ノ神（縄文・中）246. 道下北（縄文、平安？）

し、縄文時代早期の集石炉や炉穴、中期中葉の集落址、それに平安時代末期の掘立柱建物群が発見されている。この南の一段下位段丘上には新町原田北、原田南の両遺跡があり、原田北遺跡からは昭和62年の試掘調査で縄文時代中期初頭の住居址が確認されている。原田南遺跡は昭和63年に発掘調査が行われ、縄文時代早・前期の遺物や中期の住居址、それに中世の居館跡が発見された。前田遺跡は辰野西小学校付近を中心に古くから縄文時代中期の遺物が採集されている。また奈良・平安時代の遺物も遺跡内各所から採集されており、この時代に現在の北之沢川以北一帯に置かれていたと考えられる宮廻牧の中核的な遺跡である可能性がある。一方、上原遺跡の北300mには宮木諫訪神社があり、さらにその北の段丘上で現在の辰野高校一帯には天白城をうらづける遺構が発掘されており、中世の遺跡も多い。明治22年の土地台帳による地名には、「要害」「湯舟」「サンゲナシ」「神田」「平蔵」などこの地区の歴史を知る手がかりになりそうなものが多い。



第8図 周辺地名分布図

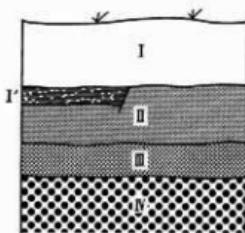
## IV 遺構と遺物

**層序** 遺跡は辰野町一帯における第1段丘の先端近くに立地しているが、調査区内の基本的な土層については第9図のとおりである。Iは表土層で、畑及び水田の耕作土、I'は水田基盤層である。IIは軟質な黒色土、IIIはややしまっている褐色土、IVは黄褐色土でソフトローム上部にあたる。遺物のうち陶磁器片はII及びI'に、縄文時代のものはIIIに主として包含されていた。

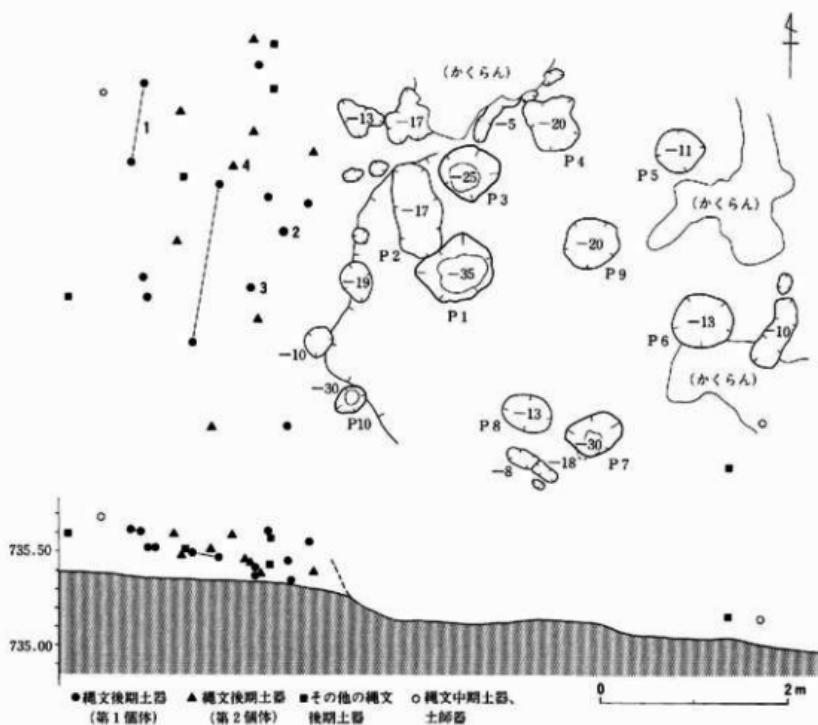
**第1号遺構** A区9坑内で、陶磁器片がややまとまって出土し、硬質な面を認めたので、第1号遺構として遺物のとり上げ等を行ったが、現況の畑地以前の水田基盤であることが判明した箇所である。I層の畑耕作土内からは昭和期の遺物が出土したが、水田基盤層内からは染付片（図版3-16）や灯明皿の破片が出土している。これらは江戸時代～明治時代にかけての遺物と考えられる。

**第2号遺構** (第10図) A区28坑内において、黒褐色土の落ち込みが認められたため拡張して掘り下げを行ったところ、無文の縄文土器多数が出土したので、この落ち込みを第2号遺構とした。深さ30cmほどのピット4ヵ所(P1、P3、P7、P10)と浅いピットや平面不規則な形状のピットから構成されており、これらピットの東寄りには竪穴の壁状の傾斜面がある。周囲には最近のかくらん坑が何ヶ所か認められ、全体としてこの遺構はきわめて不鮮明な印象をもつ。P3内からは木炭の出土があったが、焼土は認められず、住居址炉址とは考えられない。また、遺物の出土はこの遺構の東側に集中しており、ピット群により構成されるこの遺構の範囲内からは遺物の出土は認められなかった。従って、遺構周囲から出土した遺物はこの遺構に直属するものとは思われない。遺物の分布状況から、遺物と第2号遺構とは時間的に隔たりがあると判断したい。

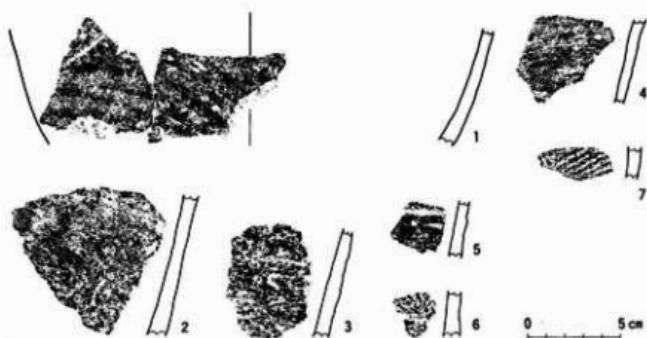
集中して出土した遺物は、2点の土器を除いたすべてが縄文時代後期～晩期の無文の深鉢形土器と考えられるものである。(第11図1～4) 1～3は同一個体片で、胎土に長石、石英、雲母等の細粒が多く含む。器内面は比較的平滑に仕上げられているが、外面は1に比較的明瞭な調整痕が認められるものの粗雑な仕上がりで、全体としてザラついた感がある。いずれも外面に煤が付着し、2は直接火熱を受けていることから底部付近の破片と思われる。4は薄手の無文土器で、胎土に雲母、長石、石英等の細粒を多く含んでいる。外面は焼き上がり良好で、横あるいは斜方向の撫で調整痕が認められる。内面は脆く剥げ落ちている部分もある。第10図には、1～3と同一個体と判断できる破片の出土地点を●印で、3と同一個体と考えられる破片の出土地点を▲で示したが、接合するものはわずかであった。これらの遺物は第2号遺構東側のIII層を中心に、25～30cmの範囲内のレベルで包含されており、第2号遺構に先行する生活面が存在していたと考



第9図 調査区基本土層概念図



第10図 第2号造構と付近の遺物分布



第11図 縄文土器拓影図

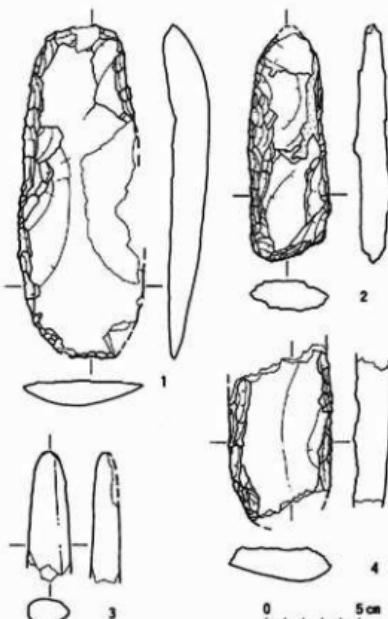
えられる。

縄文時代のその他の遺物 第11図5は外面に太沈線1本が横に引かれている細片で、胎土はやや緻密で、長石等の微粒を含んでいる。器面の仕上げは比較的ていねいで、縄文後期あるいは晩期の有文精製土器と思われる。6、7は縄文が施された細片で、いずれもC区9坑から出土している。胎土には長石等砂粒を多く含み、これらは内面調整の際に撫で方向に引きずられた擦痕をのこしている。縄文原体は7がL-T、6は不明瞭だがR-Lと思われる。この2点は調整痕などからすれば中期の土器というより、後期の粗製土器に近い印象をうける。

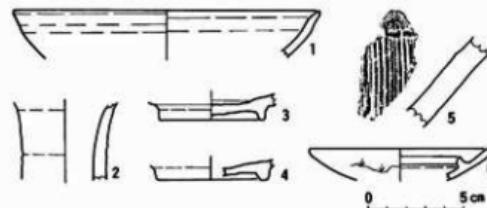
石器は第12図1～4、図版3-2などが出土している。第12図3以外は打製石斧で、1は砂岩、2、4及び図版3-2は粘板岩を用いている。1と4は転石の母岩の表面から得た継長の剥片を素材としており、片面には自然面がそのまま残っている。比較的大型の1の打製石斧は、基部と先端部の中間に段をもつ平面で、後期に類例がある。第12図3は調査区内で表採された石器で、片側縁に刃部状の加工がある断面形態から考えると、石刀の先端部の可能性があるが、反りは見られない。赤石山脈三峯川水系に産する緑色片岩をていねいに研磨して仕上げている。

平安時代以降の遺物（第13図） 2は須恵器長頸壺の頭部破片で、調査区内の表採品。1はA区37坑から出土した古瀬戸灰釉の平碗で、15世紀前半代、3は灰釉の皿で17世紀後半、5は鉄釉の擂鉢で18世紀代のものである。3、5とも調査区内の表採資料である。6の灯明皿、図版3-16、17の染付片などは江戸時代後半～明治初期ころのものであろう。17はA区5坑から出土している。

図版3-8は東濃中津川窯産のこね鉢で13世紀代。A区9坑から出土している。図版3-14は15～16世紀ころの内耳土器片、同じく9、13は幕末以降地元赤羽で焼かれていた赤羽焼である。



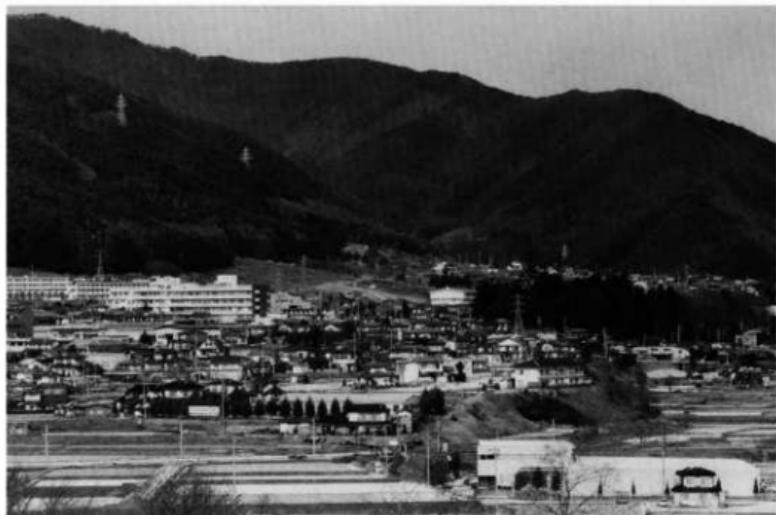
第12図 石器実測図



第13図 須恵器・陶磁器実測図



遺跡遠景（昭和 57 年 1 月）

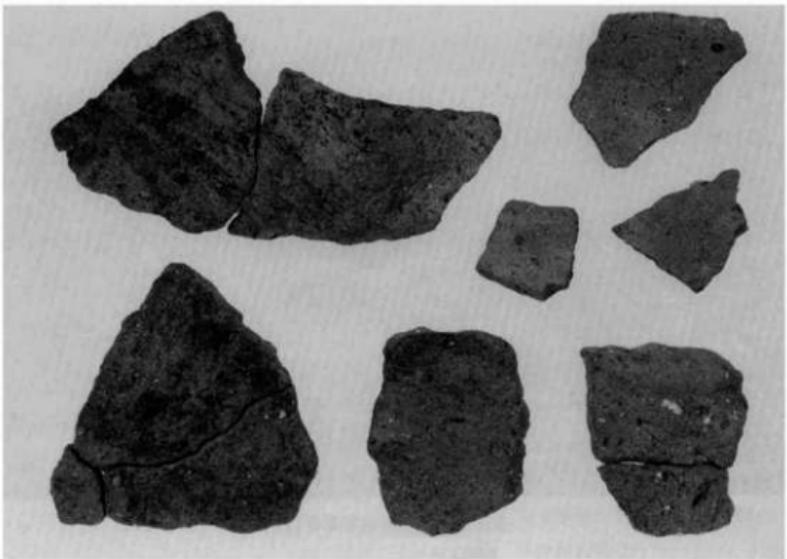


遺跡の現況（平成 5 年 2 月）

図版 2



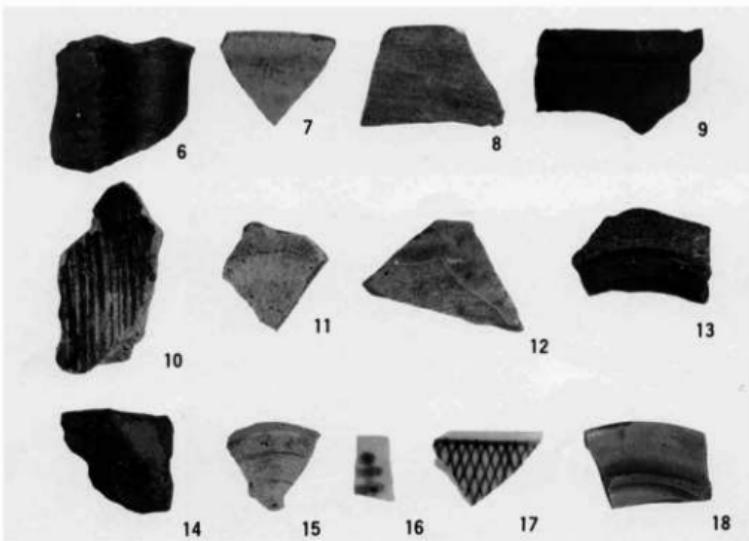
第2号遺構



縄文時代の土器



縄文時代の石器



須恵器・陶磁器

図版 4



発掘調査風景  
(昭和 57 年 1 月)



(昭和 57 年 1 月)



(昭和 57 年 1 月)

試掘調査地近景  
(昭和 57 年 11 月)



(昭和 57 年 11 月)



(昭和 58 年 12 月)



## V 調査のまとめ

この遺跡は、町内第1段丘の先端部という好条件のロケーションにあったことから、当初縄文時代の集落址の出土が予想されたが、縄文時代後～晩期ころの遺物集中地点の発見と、中世以降の陶磁器の出土を得ることとなった。

無文粗製土器のみによる遺物集中出土地点は、これに伴う明瞭な遺構を確認していないが、この時期の遺物の出土例はきわめて少ないとから、貴重な資料となった。縄文時代後期中葉以降の土器組成に占める無文粗製土器の割合は過半数を越えているにもかかわらず、形態的変化をとらえにくいゆえに、その推移などについて追求した例は少ない。従って今回調査で出土した大半の無文粗製土器についても、その帰属すべき時期を特定することは困難である。しかしながら、表探資料とはいって、後期中葉以降に出土例が多いとされる石刀の出土があることや、後期前葉以後無文粗製土器が確実に出てくることなどを考慮し、今回は後期前・中葉～晩期初頭ころの時期を与えておきたい。今後周辺等の調査や類例等により確定するものと思う。

ところで、上原遺跡近隣の縄文時代後期の遺跡として、西方600mには柳林遺跡があり、加曾利B期の大形土坑墓と土偶片が出土しており、同じく400mの泉水遺跡からはやはり加曾利B期の県宝指定土偶が発見されている。また、上原遺跡東方下段の大原遺跡西端地点からも加曾利B期有文精製土器片若干が発掘されている。従って、これら後期遺跡の拠点となるべき集落遺跡が、この付近に存在している可能性は十分考えられる。新町北原遺跡からは後期の遺物は今まで採集されていないが、可能性のありそうな遺跡である。

このほか今回の調査では陶磁器片の出土があったが、調査区中央を流れる上井筋（伝兵衛堰）開削と関連すると思われるものも含まれていた。この新井筋の開削工事は、安政5年（1856）6月に着工し、安政6年10月完成したと推定されており、調査区内水田基盤層から出土した陶磁器片は、この開削工事に伴って開田工事が行われたことを裏づける結果となった。開田後しだいに井筋の河底が下がり、取水が困難になったため井筋に隣接した水田は畠地にもどった可能性もある。なお地形図からは、この井筋開削に伴う耕作地の新たな区画割は行わず、井筋両側に分割された耕作地もそのまま伝世してきたことがわかる。

最後に、今回の調査は、中央道西宮線に伴う発掘調査以後、町内で初めて実施された発掘調査であったことを付記しておきたい。

### 参考文献

- 鈴木正博 1980 「大田区史」（資料編）考古II／百瀬新治 1981 「縄文後・晩期の無文土器」『信濃』33-4／辰野町郷土研究会 1981 「郷土」2／藤沢良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」V／安孫子昭二 1988 「加曾利B様式土器の変遷と年代」（上）『東京考古』6／長野県史刊行会 1988 「長野県史」考古資料編 全1巻（4）／辰野町誌編纂専門委員会 1989 「辰野町誌」自然編／同 1990 「辰野町誌」歴史編／宮田村教育委員会 1990 「中越遺跡発掘調査報告書」／赤羽篤・赤羽義洋 1979 「長野県上伊那郡辰野町新町出土の土偶」『信濃』31-4

## 発掘調査関係者名簿

### 1. 上原遺跡発掘調査団（昭和57年1月発掘調査）

調査団長 友野良一（考古学研究者、宮田村）

調査員 根津清志（考古学研究者、伊那市）／小木曾清（考古学研究者、宮田村）

三村兼清（辰野町文化財保護調査員）

調査参加者 有賀みつる／小松文子／城倉けさみ／堀内康義／溝口仁夫／山内志賀子（以上辰野町）／古屋公彦（箕輪町）

調査協力者 赤羽義洋／古村仁士／田中幸雄／赤坂文隆／根橋康文／片桐省平（以上辰野町誌編纂専門委員会原始・古代委員）／下平博行（宮田村）

指導専門家 孝一／郷道哲章（以上長野県教育委員会文化課）

### 2. 辰野町教育委員会事務局

教育長 熊谷大一

教育次長 杉江 学

社会教育主事 有賀久昭／社会教育主事補 三浦孝美

（以上昭和57年1月発掘調査）

教育長 小林晃一

社会教育課長 有賀久昭

社会教育係長 金子文武／社会教育係 林 康彦

（以上昭和57年度～58年度試掘調査）



発掘調査参加者（昭和57年1月）

## 上原遺跡

---

辰野町原土地区画整理事業に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 日 平成5年3月20日

発 行 者 辰野町教育委員会

印 刷 藤原印刷株式会社

---